

棒が歩いて犬に当たるくらい納得出来ない事件の顛末
(バツイチ探偵興呂木参次郎の事件簿)

登場人物

興呂木参次郎(おころぎ・さんじろう) 子持ちバツイチの中年探偵

野村純平(のむら・じゅんぺい) 参次郎の助手で後輩

船村重吾(ふなむら・じゅうご) 小説家、普段は来来軒の親父

限川勲(くまかわ・いさお) 限川電機の社長、

限川隼人(くまかわ・はやと) 限川家の一人息子

北村亮(きたむら・りょう) 限川電機の社員

牧野沙也佳(まきの・さやか) 隼人の恋人

吉川鈴子(よしかわ・すずこ) 勲の秘書

寿胡善紀(たご・よしのり) 限川電機技術主任

浦上比奈子(うらがみ・ひなこ) 隼人の雇われ親衛隊・

神崎麻里奈(かんだき・まりな) 隼人の雇われ親衛隊・

河本香苗(こうもと・かなえ) 隼人の雇われ親衛隊・

米山春雄(よねやまはるお) 農家の息子

米山里子(よねやまさこ) 農家の嫁

巽あさ子(たつみあさこ) 昔、限川電機に勤めていた男の妻

舞台上手が明るくなり、照明に浮かぶ参次郎。

参次郎

子供の頃、俺の愛読書は探偵小説だった。シャーロック・ホームズ
エルキュール・ポアロ、金田一耕助、明智小五郎といった名探偵が
活躍する物語だ。主人公は皆頭脳明晰、沈着冷静。わずかな手がかり
を元に数々の難事件を解決し多くの場合、物語の最後には驚嘆する
人々尻目に小洒落た台詞を残して去って行く。そう、そこに描か
れているのはいつも探偵という生業の持つ「浪漫」だった…。

しかし、俺はそんな物語を書いて大もうけをした作家先生達に声
を大にして言いたい、はっきり言っておたくらは無責任だ。どうせ
書くなら何故もつと探偵のリアルを書かない。せめて、物語の中
たった一言、「この職業だけは金にならない」と書いてくれていた
ら、それさえ書いてあったら…。

純平

(下手に登場)参次郎さん、参次郎さん、

参次郎

俺は探偵なんかにならなかつたし、朝っぱらからポンコツ助手の純
平と、こんなくだらないやり取りをする必要は無かつたんだ。

純平

聞いてるんですか参次郎さん。俺が作ったチラシ、ちゃんと見て貰
えしました？

参次郎

(下手に向かいテーブルに乗っているチラシを手に取る)見たよ。見

たけどこれは、ボツだ。

純平

え、ボツって、どこが駄目なんすか？

参次郎

駄目に決まってるんだろ、何だよこの「地域のお助けマン、オフィス興呂木」って。

純平

親しみやすくていい感じじゃないすか。

参次郎

ウチは興呂木探偵事務所だ。勝手に屋号を変えてんじゃないよ。

純平

そのこだわり必要ですか？

参次郎

それが基本だろ。何だよこの業務内容。水回りのメンテナンスに家具修理、年末の大掃除に迷子になったペットの捜索、これじゃ完全に便利屋のチラシだろ。

純平

お言葉ですけど参次郎さん、それウチが過去一年間にやった仕事を依頼の多かった順に並べただけです。

参次郎

こんなチラシを配ったら、益々そんな依頼ばかりになっちまうつってんだよ。

純平

どんな依頼でもあるだけです。

参次郎

お前にはプライドが無いのか。

純平

プライドじゃ腹は満たせませんから。

参次郎

そうか、じゃあ俺がプライドを食って生き抜いてみせよう。

純平

それ俺には出来ないんで、払って下さいね、ずっと頂いてない俺の給料。その為にもしっかりと働いて、

参次郎

結局お前は自分の事しか頭にないんだ。

純平

事務所の家賃もどうすんですか？

参次郎

その内払う。

純平

半年も溜めてるのに「その内」なんて通用しません。

参次郎

通用させて見せようじゃないか。

純平

じゃあそうして下さい。でもそろそろ電話も掛かって来る頃じゃないですかね、別れた奥さんから。

参次郎

…純平、

純平

毎月の養育費の振込、これは待てませんよね。麻美ちゃん、もう中学二年生ですか。

参次郎

…卑怯だぞ、純平。

純平

現実を見ましようよ。

参次郎

あく何ゆえ現実はまだ職務を全うしたいだけの誠実な探偵に、かくも理不尽であり続けるのか。

純平

今の時代、探偵事務所らしい依頼なんて、みんな大手の興信所に持つてかれちゃうんです。

参次郎

…(咳く)負け犬根性だ。

純平

負け犬でも、歩けば棒に当たるかも知れないでしょ。地味な仕事を誠実に続けて、お客の信頼を得ましようよ。そしたら次の展開が開けるかも知れないじゃないですか。

参次郎

…次の展開？

純平

はい。犬も歩けば、

参次郎

…棒に当たるとか。

純平

俺、探偵としての参次郎さんの腕を信頼してるんです。だから、どうしても二人で続けたいんですよ、この事務所を。

参次郎

…純平。

純平

…参次郎さん。

突然照明が変わり、上手のスポットに戻る参次郎。

参次郎

なぐんて柄にもないお涙頂戴なやり取りのせいで、俺は今回もまたろくでもない事件に巻き込まれてしまった。そう、そのふざけた事件はこんな風に始まった。

上手奥に退場する参次郎。(SE)急ブレーキ、人をはねる音。しばらくして車のドアが開閉する音。

沙也佳(声)

隼人。

舞台うつすらと明るくなり、夜の車道。隼人が下手奥より掛け出して、上手前に。

隼人

(気が動転し、泣きそうになっている)はくはく、何だよも。ついてねえよ。

沙也佳

(隼人を追って下手より)隼人、どこ行くのよ、何で逃げ出すのよ？

隼人

しょうがないだろ、怖いんだから。

沙也佳

…ったく。喋ってばかりで、ちゃんと前見てなかったからよ。

隼人

違いよ。夜中にこんな田舎道を歩いてる奴が悪いんだよ。

沙也佳

ねえ、戻ろう、戻ろうよ。(答えない隼人)隼人、

隼人

…血、出た？

沙也佳

え…見て無いよそんなの。私だって怖いもん。

隼人

見て来いよ。死んでつかもしいし。

沙也佳

嫌よ。

隼人

(小さく独白)…誰も見て無いし、このまま逃げるか。

沙也佳

ダメよ、ひき逃げなんて。

隼人

…。

亮(声)

隼人さくん。

沙也佳

北村さん、呼んでるよ。

隼人

…沙也佳、運転してたのは、亮だったよな。

沙也佳

(驚き)…何言ってるの？

隼人

運転してたのは、亮だった、そうしよう。

沙也佳

そんな事、

下手より亮、登場。隼人の元に走り寄る。

亮

隼人さん、車に戻って下さい。

隼人 あいつをはねた時、俺、助手席で寝てたよな、亮。

亮 え？

隼人 運転してたのはお前、そういう事にしてくれ。

亮 …。

沙也佳 隼人、何言ってるの、そんな事、

亮 いいですよ。だから、車に戻りましょう。

隼人 …いいのか？

亮 運転してたのは私です。事故を起こしたのも私です。

隼人 …うん。

亮 さあ、行きましょう。

隼人 ほら、俺変なことになったら、ファンのみんながガツカリするから

さ。

亮 分かってます。

隼人 悪いな、亮。

亮 気にしないで下さい。それに、あの人大した怪我じゃないですから。

隼人 えっ、（驚いて亮を見つめる）大した怪我じゃ無いって、

亮 かすり傷ですよ。

隼人 でも、身体、宙に浮いて、一回転して、

亮 落ちた先の藪の小枝がクッションになったみたいで、運が良かったんですよ。今、後部座席で休んで貰ってます。本人、自分も不注意だったって。

隼人 ……そっか。

亮 一応、病院に連れて行って精密検査を受けて貰います。だから、急がないと。

隼人 分かったよ。何だ、大した怪我じゃないのか。

亮 後は私に任せて、隼人さんはホテルに着いたらゆっくり休んでください。明日はいよいよツアー最終日ですから。

隼人 うん、そうだよな。

沙也佳 …隼人、

隼人 (沙也佳の視線に) 何だよ。俺達アーティストは世の中の常識にとらわれてたら駄目なんだよ。俺の歌を聴いて、人生が変わる奴もいるんだから。

亮 さ、行きましょう。

隼人 亮、車、凹んでたら買い換えるから親父にそう言っといてくれ。

亮 社長からは、余り無駄遣いするなって言われてます。

隼人 大丈夫だよ。適当な理由つけたら金は出してくれるって。

亮
でも、

隼人
そうだ 来月の大坂のライブ、オープンカーで会場入り、これインパクトあるだろ。

亮
隼人さん、

隼人
(下手奥に向いながら)いいな亮、ちゃんと親父に頼んどいてくれよ。

下手に退場する三人。

隈川電機社長室。ソファーに座っている隈川勲。資料を持って直談判に臨んでいる技術主任の夢胡。

夢胡
社長、お願いします。お願いですからもう一度このデータを見て下さい。SRSBは充電時間の驚異的な短縮に成功して、エネルギー効率は従来型の三倍です。電極の劣化もほとんど見られない。これは正に世界を変える技術なんです。

勲
分かった、分かったよ夢胡君。

夢胡
社長が新しい工場の建設資金の問題を心配されるのも分かります。でも、もう完全に実用可能な技術として確立しているSRSBをい

つまで寝かせておくんですか。そんな事をしていたら、

だから分かったって言ってるだろ。すぐに新しい生産ラインを立ち上げる準備に取りかかってくれ。

え？

可能な限り早い時期に、SRSBを隈川電機の主力製品として売り出そう。

本当ですか？

ああ。

…でも、

資金に目処がついたんだ。なあ吉川君。

ええ。SRSBの製品化だけじゃありません。来期は開発部の予算も大幅に増額出来そうです。

…社長、

勲

夢胡

勲

夢胡

勲

夢胡

勲

吉川

夢胡

勲　　そういう事だ。これからは君たち開発部も金の事で不自由な思いをしなくて済む。

彗胡　でも社長、何故急に…。

勲　　この吉川君が奔走してくれたんだ。融資を渋っていた銀行が、彼女の魔法にかかって資金を出してくれる事になった。

彗胡　魔法？

吉川　社長、何を仰ってるんですか。

勲　　魔法みたいなもんじゃないか。

吉川　大げさですよ。

勲　　吉川君が銀行と交渉したいと言うから任せてみたんだ。そしたら、一人で銀行に乗り込んで、見事に話をまとめて来てくれた。まったく驚いたよ。

彗胡　本当ですか。

勲 これまで何度も交渉をして、その度に跳ね返されてきたんだ。だから彼女にどんな魔法を使ったんだって聞いたんだよ。

吉川 私はただ、自分が素人だから、素人にも分かるように資料をまとめただけです。

勲 そう、だからこそ説得力があったんだよ。

夢胡 じゃあ、このところ吉川さんがウチの部に何度も顔出されたのは、初歩的な質問ばかりさせて貰って、鬱陶しかったでしょう？

吉川 とんでもない。あくでも、そういう事だったんですね。吉川さんのおかげで、

夢胡 私じゃないの。結局、夢胡さん達が開発した技術が、銀行を説得したんです。

吉川 開発部の連中、みんな大喜びしますよ。寝る間も惜しんで作ったRSBが、やっと日の目を見るんですから。

勲 夢胡君、実はね、近々ウチは株式も上場する。

夢胡

えっ、そうなんですか。

勲

そうになったら更に潤沢な資金が用意出来る。

吉川

社長、その件はまだ、

勲

ああ、そうだね。

夢胡

ウチ、株を上場するんですか？

吉川

まだ本決まりではありません。内々に準備をしている段階で。色々調整も必要ですから。だからこの件に関しては、まだ…。

夢胡

勿論です。でも、そうなんですか。

勲

君たち開発部の夢だった「良いアイデアには惜しみなく資金をつぎ込む会社」それがやっとな実現だ。

夢胡

良かったです。本当に良かった。

嬉しそうな三人、人の気配に気づいた吉川が下手を見る。

吉川

誰？

亮

（上手から）…すみません。隼人さんの事で、社長にお話があつて。

勲

どうした、又何かあつたのか？

亮

…はい。

彗胡

社長、私はこれで。今の話を開発部のみんなに早く知らせてやりたいので。

勲

分かった。今日はみんなで前祝いでもして、景気づけしたら良い。

彗胡

ありがとうございます。じゃあ、失礼します。

出て行く彗胡、その姿を目で追う亮。

亮

開発部の方、ですか？

勲

主任の彗胡君だ。若いけど優秀な技術者だよ。

吉川

北村君には関係無いでしょ。

亮

すみません。

勲

で、隼人がどうした？

亮

(吉川を気にして) …はい。

勲

吉川君なら構わんよ。

亮

…隼人さんが…ストーカーにつきまとわれていて…。

勲

ストーカー？

亮

はい…音楽活動に支障が出ているだけじゃなくて、これまで何度も命を狙われているから…。

勲

どういう事だ？

昼、興呂木探偵事務所。下手、ソファーに腰掛け舞台奥に向かって話す参次郎。

参次郎

だから順平、俺も悪かったって、さっきからそう言ってるんだろ。

純平(笑い声)

俺「も」ですか。

参次郎

いや、だから俺が悪かったよ。

純平

(鞆と衣類や歯ブラシ、コップなどを持って奥から登場) もういいです。とにかく俺は今日限りで辞めさせて貰いますから。

純平、テーブルの上に鞆を置き、荷物の整理をする。

参次郎

冷静になって考え直せ。昔から短気は損気って言うだろ。

純平

断言します。この事務所を辞めて損する事なんて何一つありません。

参次郎

俺達の絆はどうなる、ずっと二人でやって来たんじゃないか。怒りにまかせて大切な物を見失っていいのか？

純平

人をあんな目に遭わせておいて、良くそんな事が言えますね。

参次郎

あれはたまたまあなただけで、悪気はなかったんだよ。

純平

何がたまたまですか。今度ばかりは参次郎さんという人間の本质を見てしまいました。

参次郎

純平、お前ネガティブになり過ぎてるよ。物事には必ず良い面と悪い面があつてな、

純平

この事務所と参次郎さんに限っては、悪い面以外無いと思います。

参次郎

いやいや、少なくとも俺は、今回の事で自分にとってお前がどんなにかけがえのないパートナーであるか思い知らされた。それは今後の二人にとって大きな進歩だと思わないか？

純平

今後の二人というのも、もうありませんから。

参次郎

そんな身も蓋もない事言わずにさ。(すり寄る)

純平

やめて下さい。参次郎さん、自分が何したか分かってるんですか？

参次郎

まあ、分かってるって言えば、分かってるけど、

純平

あの時、俺がどんな怖い目にあつたか、もう少しで、ホントに死ぬとこだったんですよ。

照明が変わり、夜の田舎道を走る車内。走行音のS.E。事務椅子を車に見立て、ハンドルを持つ参次郎と助手席の純平。

純平

「仕事が忙しくてずっと田舎に帰ってない、一人暮らしの父がとても心配だ」って、優しい息子さんですよ。正直俺、自分たちに何が出来るんだろって、最初は不安だったんですよ。でも、いやく行って良かった。(チラリと参次郎を見る)

参次郎

…(仏頂面)。

純平

さすがに五日間はきつかったけど、お爺ちゃんすごい喜んでくれたし、参次郎さん、人助けってやっぱり気持ちいいですよ。

参次郎

…。

純平

そうだ、貰った米や野菜で来々軒に溜まつてるツケを払いましょう。近頃野菜高いから、親父案外喜ぶんじゃないすかね。

参次郎

…。

純平

俺、チラシ作り直しますから。今度は参次郎さんが言ったように少し、

参次郎

(何かを前方に見つけ)おい純平、

純平 え？（参次郎の視線の先を追う）

前方に見つけた対象物を通り過ぎていくような二人の視線。再び黙る参次郎。

純平 …？

参次郎 今の、可愛かったな。

純平 えっ？

参次郎 今のうり坊、可愛かったよな。

純平 …うり坊って、何の話ですか？

参次郎 お前うり坊知らないのか？猪の子供をそう言うんだよ。

純平 いや、それ位知ってますよ。

参次郎 じゃ何で聞くんだよ？

純平 え？（笑いを堪え）参次郎さん、

参次郎 何だよ？

純平

さっきの、ただの岩ですよ。いや、大きめの「石」というか。

参次郎

は？お前何言ってるんだよ。うり坊だったよ。

純平

いやいやいや、(笑いながら)ただの岩ですって。

参次郎

うり坊だよ。

純平

(笑)だからただの岩ですって、(SE・急ブレーキ)うわつ、(急停止する車)参次郎さん、急にどうしたんですか？

参次郎

行って確認して来い。

純平

え？

参次郎

さっきの岩だったら、まだあそこにあるはずだよな。うり坊だったら逃げてる。お前行って確認して来い。

純平

…参次郎さん…だって、あれは、

参次郎

だから行って確認して来ればいいだろ。

純平

…あ、あれやつぱりうり坊でした。はい、俺の間違いです。

参次郎

駄目だ、ちゃんと確認して来い。

純平

だから参次郎さん、

参次郎

いいか純平、今度の件、俺はずっと我慢していた。

純平

は？

参次郎

何で探偵の俺が、朝五時起きで、牛や豚の世話をしなきゃならぬい？

純平

だからそれは、

参次郎

虫が大嫌いな俺が、何でムカデやゲジゲジと格闘しながら崩れた田んぼのあぜ道を直さなきゃならない？

純平

そういう依頼だったから、

参次郎

そう、お前が作ったあのチラシのせいだ。しかし俺は、『ああ確かに純平は馬鹿だ。でも馬鹿は馬鹿なりに事務所の借金の為に色々考えてあのチラシを作った。そうだここで腹を立てるのは大人げない』

そう思って、顔には出さずこの五日間、グツと堪えてたんだ。

純平 いや、メチャメチャ顔に出てましたよ。

参次郎 なのに何だ今のは、

純平 今のはって？

参次郎 俺がせっかく雰囲気を変えようと思って「うり坊可愛かったな」って振ったのに、良く見もしないで「あれ岩です」って、何だお前は。

純平 だって、岩だったから、

参次郎 だから行って確認して来い。

純平 外暗くて良く見えないし、俺怖いっいよ、

参次郎 月も出てる。

純平 …分かりました。行きますよ、行けばいいんですよ。

参次郎 早く行け。

純平 (ドアを開け車外へ、心細げに) まったく。待って下さいよ。

下手に向かつて歩く純平が車から少し離れた時、ウインドを降ろす参次郎。

参次郎 純平、

純平 はい？

参次郎 ばゝか、少し反省しろ。

純平 え、(S・E・車を発進する参次郎) え、何やってるんですか、参次郎さん、参次郎さん。(車が見えなくなる) …え…え…え…その場にへたり込む。S・E・フクロウの鳴き声…何なんですか…ひどい、ひどいっすよ。こんな所に置き去りにして…絶対怒んでやる、くそ、(涙)…参次郎さん…。

暫くして、上手から車。参次郎が戻ったと思いい立ち上がる純平。車に向かつて、

純平 (安堵) ふざけるのもいい加減にしてくださいよ。(叫ぶ) 参次郎さん、
参 次郎さん、(S・E・急ブレーキと衝突音) うわ、(身体が宙に浮き、
一回転する純平)

照明変わり、事務所に戻る。椅子に座っている二人。

純平

本当に身体が宙に浮いて一回転したんですよ。死んでもおかしくなかったんです。

参次郎

分かる、分かるよ。

純平

いや、絶対分かってないですよ。

参次郎

痛かったよなく、怖かったよなく。

純平

白々しいです。

参次郎

今回ばかりは俺も反省してるって。やり過ぎたよ。

純平

反省しているようには見えません。

参次郎

してるさ。それに、結果的にはお前だって、ちょっと美味しい思いましたんだろ？

純平

…はあ？何の話ですか？

参次郎

いや、だから、その病院の特別室とやらで、至れり尽くせりの三日間を過ごして、「見舞金」も貰ったって話だから、(笑顔)うん。

純平 ……まさか…。

参次郎 ……(笑顔)うん。

純平 ……そういう事を言いたい訳ですね。

参次郎 まあ、それがあれば、助かるかなって。

純平 ……参次郎さん、あんた、本当に本当に最低だ。

参次郎 おいおい、何もそこまで、

純平 何が絆ですか、何がパートナーですか。俺を引き止めるをふりしながら、結局…。(怒りに震える)

参次郎 しょうが無いだろ、ある意味二人で作った借金なんだから、二人で返していかないと。

純平 借金作ったのは俺じゃありません。

参次郎 ずっと二人でやってきた事務所だろ。

純平

ただ働きさせられて死にそうな目に遭って、その上何で俺が借金を被るんですか。そんな理屈に合わない事、

参次郎

だから今は理屈じゃ無いんだよ。非常事態なんだから。

純平

非常事態、(笑)そうですか、そうですか。

参次郎

そうだよ。事務所の家賃だって、さすがに今月払わなかったらもう出て行くしかないだろ。

純平

だから俺の貰った見舞金を事務所の家賃に充てろと。(笑)おあいにく様です。

参次郎

何だよ？

純平

俺だってずっと給料貰ってないんです、アパートの家賃は溜まりに溜まってましたよ。

参次郎

え、

純平

はい、お陰さまで、頂いた見舞金は全部そちらに充てさせて頂きました。

参次郎

純平、お前、何て事をしてくれたんだ。

純平

はあ？俺が貰った見舞金、どう使おうと俺の勝手ですよ。

参次郎

やっぱりお前は自分の事しか考えていないんだな。

純平

それはこっちの台詞で、（参次郎にヘッドロックされ）痛、イタタタタタ、

参次郎

この野郎、見舞金よこせ、

純平

だから家賃に使ったって言ってるでしょう。イタタタタタ、

参次郎

使い込みか、この野郎、

純平

やっぱりメチャクチャだ。

下手より船村登場。

船村

ちわく。

純平

おやつさん助けて。

参次郎

黙れこの野郎、大家に掛け合って家賃返して貰ってこい。

純平

鬼、イタタタタ、

船村

参ちゃん、

純平

イテテテテテ、

船村

参ちゃん、

参次郎

(純平を解放し)何だよおやつさん、

純平

タ、

船村

参ちゃん、相談なんだけどね。

参次郎

金なら無いよ。

船村

そう言うだろうと思ったけどさ。

参次郎

(純平)こいつのせいで、事務所は潰れそうなんだよ。

純平 何言ってるんすかまったく、俺もう本当に出て行きますからね。

参次郎 ああ出てけ出てけ、使い込みするような従業員に用は無い。

純平 はあ？

参次郎 しっしっ、

純平 ったく。

参次郎 おやっさん、見ての通りだから。

船村 でも参ちゃん、さすがにもう半年分溜まっちゃってんだよ。

純平の携帯が鳴る。参次郎が「うるさいよ」という視線で純平を見る。にらみ返して電話に出る純平。

純平 (二人から離れ小声で)はいもしもし。

参次郎 半年分ねえ。そう言やここんとこ、昼はほとんど来々軒だよな。

船村 そう、ほぼ毎日。

参次郎

俺の身体、細胞のほとんどがおやっさんのまずい料理で出来ているって事か？そう考えたら恐ろしい話だ。

船村

味はちゃんと値段に比例してるから文句は言いつこなしだよ。

参次郎

おやっさんも近頃返しが上手くなったな。小説の腕も上がったんじゃないの。

船村

そっちは相変わらず。毎月応募してる懸賞はかすりもしない。

参次郎

おやっさん程の才能があっても？。

船村

参ちゃん、今日はごまかされないよ。

参次郎

はははははは、

船村

はははははは、

参次郎

無い袖は振れない。

船村

参ちゃん、

純平

(大声)はい、はい、分かりました。(急に大声を出した純平に注目す

る参次郎と船村)明日十四時、必ず伺います。(電話を切り参次郎の顔を見る純平)参次郎さん…お仕事です。

参次郎

仕事？何だよお前、出て行くんじゃないかったのか。

純平

そんな事言ってる場合じゃありません。この仕事でガツポリ儲けて借金全部すつきりさせましょう。

船村

何？いい話かい？

純平

いい話もいい話、危険だけど成功報酬はガツポリの依頼です。

参次郎

何だよ、スズメバチの駆除か、高層ビルの窓拭きの依頼か。

純平

いいえ、そんな便利屋の仕事じゃありません。猟奇的なストーカーにつきまとわれているアーチストを警護し、その命を守るといいう、正に探偵の仕事です。

参次郎

本当かよ？

純平

この事案、完全に解決した場合の報酬は、(指五本)だそうです。

参次郎

五十万、

純平

いいえ、成功報酬実には「五百万」の仕事です。

曲が流れ、照明代わり、身支度をし、車に乗る二人。(キヤスター椅子)SE・車内の走行音。

純平

という事でストーカー被害に遭ってるのは、あの夜俺を跳ねた車に同乗していた隈川隼人ってミュージシャンです。

参次郎

で、依頼主がその隼人の父親で、隈川電機の社長って事か。

純平

はい、社長の名前は隈川勲です。それで電話してきたのは車を運転していた北村亮って人で、最初マネージャーかと思ったんですけど、隈川電機の社員だそうです。俺を跳ねた人だけど、礼儀正しい感じの良い人なんですよ。

参次郎

なるほどな。

純平

ちゃんとチラシを渡して、「何かあったら連絡ください」って言っといて良かったっすよ。

参次郎

俺はこうなる事を見越して、あの山道でお前を車から降ろしたんだよ。

純平

参次郎さん、さすがにそのいい訳、無理があるでしょ。

参次郎

まあな。(笑)

純平

(スマホを見ながら)隈川電機は八十年代から九十年代にかけていくつかの特許を取得して、それをきっかけに急成長した部品メーカーです。先代の創業社長が自己資金での経営にこだわって、株式の上場こそしていませんが、業界では中堅クラスの会社だそうです。

参次郎

そこそこでかいって事だな。

純平

て事でしょね。

参次郎

純平、もう、この辺りじゃないのか？

純平

(スマホで確認している)あ、そうですね。その先の十字路を右折したら、すぐ右側に出て来る筈です。

参次郎

(ハンドルを切りながら)さてさてどんな豪邸かな…ん？

純平

あれ、

参次郎

思ったより普通な感じだな。

純平

まあ、それなりに大きな建物ですけど…。

車のまま(キャスター椅子に座ったまま)下手に退場する二人。転換明かりの中、応接室のソファーに座る勲、隼人、亮、参次郎、純平の五人。

隼人

そう、だから最初は気のせいかなって思ったんだけど、いつも誰かの視線を感じる訳よ。そんで十日前、ついに脅迫状が届いたんだよ。

純平

(メモを見ながら)「音楽活動をすぐにやめなければ命は無い」ですか。で、その脅迫状が届いた翌日、歩いてたら突然目の前にコンクリートブロックが落ちて来て、それから二日後、階段で誰かに背中を押された。その後は三日連続でバイクに跳ねられそうになったという事ですね。

隼人

(楽しそう)そうそう、そんな感じ。

純平

…(隼人に違和感を感じ)そんな感じ。

参次郎

でも、脅迫状は捨ててしまったと…。

隼人 最初は悪戯だと思ったから。

参次郎 コンクリートブロックが落ちてきた場所も憶えていない…。

隼人 酒飲んでたし、新宿の何処かだよ。やべえ殺されるって思ったから、慌ててタクシー拾ってその場を離れたんだよ。

参次郎 階段で背中を押した相手の顔も確認出来なかった…。

隼人 多分女だとは思うんだよ、髪が長かったから。逃げてく後ろ姿だけ見えたんだよ。

純平 バイクのドライバーはフルフェイスのヘルメットをしていて、これも顔は分からない…うくん…参次郎さん。

参次郎 …うん。

隼人 ごめんね、手がかりが少なくて。

亮 あの、隼人さん、そろそろお時間です。

隼人 あ、そうだな。興呂木さん、俺、今日ファンミーティングがあるから、これでいいかな。

純平

えっ、

参次郎

いいですよ。

(驚いている純平)

隼人

亮、後は頼むわ。

亮

分かりました。

上手に向かい、退場する隼人。

純平

参次郎さん、俺達一緒に行かなくてもいいんですか？

参次郎

(勲に)今日は、いいですよね。

勲

あ、はい。

純平

でも、隼人さんを守らないと…。

参次郎

隈川さん、ストーリーの話は、嘘ですよ？

純平

は？

勲 …お気づきになりましたか。

参次郎 息子さん、本気で犯人を捕まえて欲しいようには見えませんし、命を狙われてるような緊張感も無い。

純平 あゝそれ、俺も感じました。

参次郎 でも、我々は今日ここに呼ばれた。今回の本当のご依頼は何ですか？

勲 …さすが、探偵さんですね…。

亮 社長、

勲 うん。隼人は…勿論、私にとつては可愛い息子ですが、世間的に見たら、決して出来の良い子ではありません。

参次郎 そのようですね。

純平 参次郎さん、

勲 この機会に、あの子に生まれ変わって貰いたいと思ひまして。

参次郎

この機会、というのは？

勲

お恥ずかしい話ですが、ストーカーの件は、隼人が話題作りの為に思いついた話です。

純平

話題作り…？

勲

ライブの客が増えない事に焦って、どんな方法でも、注目されたら客が増えるんじゃないかと考えたようです。

純平

なるほど。

勲

私は、北村君から真相を全部聞きましたが、隼人の前では欺された振りをしています。だから、隼人は私がストーカーの話を信じて、犯人捜しの為に興呂木さん達を呼んだと思っています。

参次郎

でも、そうじゃないんですね。

勲

ええ、違います。興呂木さん達には、あの子を鍛え直して欲しいんです。

純平

鍛え直す？

亮

あの、社長、私から説明させて頂いても宜しいでしょうか。

勲

頼むよ、北村君。

亮

私は、社長のご指示で、隼人さんの補佐をしています。

参次郎

補佐？

亮

分かり易く言うと、お世話係です。

勲

公私混同だと言われても仕方ありませんが、私が頼んで、北村君に隼人の面倒を見て貰ってるんです。

亮

私は、出勤から退社まで、一日中ほとんど隼人さんのマネージャーのような仕事をしています。勿論私は隼人さんの夢が叶い、社長が安心できる方向に事が進むように努力しているつもりです。ただ：社長の前ですが、隼人さんは時々無茶な事も仰っています。そして、今回のストーリーカーの話は、さすがに無理だと思っただけです。SNSや週刊誌で話を出来るだけ拡散して注目を集めると言われたんですが、そんな事したら大変な事になりかねません。

参次郎

まあ、さつきみたいな説明では、ちょっと調べたらすぐに嘘だとバレますよね。

純平

バレたら、それこそ逆効果ですよ。

亮

はい。音楽活動は続けられなくなるでしょう。でもそれだけじゃありません。私が思ったのは、仮に今回の事が問題にならなくても、今のままの隼人さんでは、いずれ又大きな問題が生じるという事です。でも、私には隼人さんを変える力は無い。悩んでいた時に、病院で純平さんから聞いた興呂木さんの話を思い出したんです。それで、隼人さんの現状も合わせて、何もかも社長に相談したんです。

勲

正直、北村君から聞いた隼人の事は、やっぱりかという思いもありました。甘やかして育てた私のせいなんです。

純平

まあ社長さんなんて、お忙しいでしょうから。

勲

興呂木さんは非常に優秀な探偵でいらっしやるだけでなく、家族やコミュニティの問題にも丁寧に対応しておられると聞きました。だったらここは是非、そんな方にお願いしようという事になったんです。少しくらい時間がかかっても構いません。隼人を、鍛え直してやって貰えませんか？

参次郎

息子さんを変えるって事ですか。(純平に小声で)やっぱり便利屋の仕事じゃないか。

純平が勲達に見えないように、開いた手の平をもう片方の手の人差し指で指す。(五百万ですよの意味)苦々しい顔をする参次郎。

勲 何か？

純平 何でも無いです。

参次郎 隈川さん、何で隼人さんに音楽をやらせてるんですか？

勲 え？

参次郎 いや単純な疑問です。普通、こちらのような家の一人息子だったら、まずは会社を継がせることを考えるんじゃないかと思いません。

勲 ええ。でもそれは本人が望んでいませんし…自分の人生を人に決められる悔しさは、私にも良く分かるので…。

純平 え？

勲 私、若い頃、画家になりたかったですよ。でも父親が許してくれませんでした。

純平

そうなんですか。

勲

今も憶えています。内緒で取り寄せた美術大学の願書を破り捨てられ、反発して家出をしてもすぐに連れ戻され、結局、最後は親の言うなりに、随分悔しい思いをしたのを。

参次郎

だから自分の子供には、そんな思いはさせたくないと…。

勲

はい。ただ、隼人に関しては私の判断が正しかったのかどうか…何をやっても長続きしないあの子が、唯一夢中になったのが音楽でした。だから、何とか形にしてやろうと、力を入れ過ぎました。

参次郎

要するに、金をつぎ込んだという事ですよね。

勲

はい。引き受けてくれる芸能事務所を探し、CDを出したり実力に不相応なコンサートをさせたりと、随分金は使いました。

参次郎

…そうですか。

勲

興呂木さん、お願い出来ませんか？

参次郎

…隈川さん、やり方は全てこちらにお任せ頂く、それで宜しいです

か？

勲
それは…？

参次郎
多少手荒な事もするかも知れませんが、音楽活動がうまくいくかどうか、二の次になります。

勲
…。

亮
社長、

参次郎
大事な事は隼人君が独り立ちする事でしょう。成功したかどうかの判断は、隈川さんにお任せします。

純平
参次郎さん、

勲
…分かりました。お願いします。

参次郎
じゃあ、早速だが純平、北村さんから隼人君のメアドを貰って、あらためて脅迫メールを送つてくれ。

純平
え？

参次郎

文面は、そうだな……ちよつと安っぽいが「無能なくせに親の金でコンサート、音楽を冒瀆する隈川隼人を許さない」まあ一通目はこんな感じでおとなしく、二通目、三通目で徐々に過激にしていこう。

亮

あの、興呂木さん、

純平

参次郎さん？

参次郎

本当に脅迫されてると思つたら、警護する俺達の言う事を聞かなくやならなくなる。隼人君の行動をこつちが制限出来たら色々やり易くなるだろ。

亮

なるほど。

勲

あの、

参次郎

何ですか？

勲

お約束ですから、口出しはしませんが、どうかお手柔らかに。

参次郎

いやいや、手加減はしませんよ。

純平 参次郎さん、

参次郎 で、北村さん、実際のところ、隼人君才能はあるんですか？

亮 えっ、

参次郎 いやだから、音楽の才能だよ。歌、上手いの？

亮 …それは…。

伏し目がちに也、参次郎の目を見ない亮と勲。

参次郎 ん？

純平 ん？

転換明かり。SEで隼人の歌のエンディング部分が聞こえる。

隼人の歌(下手) 根こそぎ持つてくオイラの魂、オーストリツ〜チ、メ〜ストップア〜、

ジャンゴ〜ラ〜ブ。

曲が終わり明るくなる。リモコンを持つて立っている沙也佳。背後に比奈子、麻里奈、香苗も立っている。

沙也佳

という事で、最後に聞いて貰ったのが最新曲の「オストリッチ、メ
ストップア、ジャンゴラブ」。

笑いを堪えている麻里奈、無然としている香苗、驚いている比奈子。

比奈子

あの、すみません。

沙也佳

何？

比奈子

ジャンゴラブってジャングルですよ。オストリッチは？

麻里奈

ダチヨウじゃない。財布とかバッグにあるじゃん。

沙也佳

正解。

比奈子

じゃあ、メストップアは？

麻里奈

(沙也佳に)何だっけ？

沙也佳

それは、(小声)「雄と、リッチ」でしょ、だから「雌と、プア」…。

比奈子

えっ？

(笑う麻里奈)

沙也佳

意味なんていいの。歌の歌詞はアーティストのインスピレーションだから。

麻里奈

(笑)そうね、私方向性は好きよ。七十年代イギリスのパンクロックって感じ。まあ歌は酷すぎだけど。

沙也佳

麻里奈さん、今のNGだから。

麻里奈

あ、そっか。ごめんごめん。

香苗

沙也佳さん、

沙也佳

何？

香苗

契約書に書いてあった守秘義務って項目なんですけど、

沙也佳

ええ。

香苗

違反した場合の罰金、高すぎませんか？

麻里奈

あれ、あんた初めからリークするつもりでいんの？もしかしてスパイ？

香苗

私はサインする前に契約内容に納得したいだけ。守秘義務の範囲も曖昧だし。

沙也佳

分かりました。金額は変えられないけど、守秘義務の範囲は明確に出来るよう検討します。

比奈子

あの、お給料の方は、振込なんでしょうか？それとも手渡しで？

沙也佳

お給料じゃなくて活動費ね。

麻里奈

あ、隠語って奴だ。

沙也佳

特に希望が無ければ振込になるけど。

比奈子

私、直接頂いてもいいですか？

沙也佳

分かりました。

麻里奈

どうでもいいけど、あんた何か細かいわね。

比奈子

すみません。

香苗

何で私達三人一度に採用なんですか？

沙也佳

え、

香苗

前任の人達って…？

沙也佳

前任はいません。今回の様な主旨で集まって頂くのは皆さんが初めてです。

香苗

…分かりました。

沙也佳

他に何か質問は？

麻里奈

大丈夫です。

沙也佳

じゃあ、もう一度言いますけど、皆さんにお願いするのは、隈川隼人の「自然発生的に出来た」親衛隊の核になって頂く事です。

麻里奈

了解、あくまで自然発生ね。

沙也佳

もうそろそろ隼人がここに来ます。みなさんは熱狂的なファンとして彼を迎えて下さいね。これが第一回目のファンミーティングになります。

麻里奈

(比奈子に)なんかちよつと楽しみじゃない？

比奈子

…はあ。

麻里奈

DVDも見ちゃったし、私もう本当に隼人のファンだもん。

香苗

あんたさつきからほんと調子いいわね。

比奈子

沙也佳さん、あの、隼人さんって…、

沙也佳

何？

比奈子

こういうので、よくありがちな、その…セクハラとか…。

沙也佳

あくそういう事、心配しないで大丈夫よ。ちよつと単純だけど、根は悪い人じゃないから。どちらかと言うと、

下手奥よりスマホを持って飛び込んでくる隼人。

隼人

沙也佳く、

沙也佳

隼人、

隼人 沙也佳、俺、殺される、殺される、(スマホを見せる)

沙也佳 何言ってるの？だからこれは、

隼人 違いーんだよ。本物、本物、本物の脅迫なんだよ。

曲が流れ、転換明かりの中、隼人を見て引いている女子三人。上手から下手に車で移動する参次郎と純平。移動中、参次郎に言われるままメールを打っている純平。

純平 文面、ちょっと過激過ぎないですか？

参次郎 いいから送信しとけ。

スマホからメールを送信する純平。SE・メールの着信音

隼人 うわっ、また来た、(メールを読み) なな、何だよこれ、

沙也佳 隼人、

参次郎 次はシンプルに「お前は既に死んでいる」

純平 え、ホントいいんすか？ポチッ(送信)

隼人

(S.E・着信音)また来た、(スマホ確認)もう駄目だ、助けてくれ。

沙也佳

隼人しっかりして、隼人、

照明が変化する中、参次郎達は下手に退場。隼人と沙也佳も上手に退場。上手客席寄りに移動しスポットに浮かぶ女子三人。ファンミーティング(新人研修)からの帰り道。三人で足の長い丸テーブルを囲み、立ち飲みofイメージ。底にビールが少し残ったジョッキを手に持つ麻里奈、徳利と猪口でちびちびやりながら。低く冷たく反芻するように話す香苗、ジンジャーエールのグラスを両手で包むように持つ比奈子。

麻里奈

ざけんじゃ無いわよ、何いきなり自宅待機って。(ソデに向かい大声で)お兄さくん、生お代わり。

香苗

とりあえず、あさって以降の予定は追って連絡します…あの沙也佳って女、マネージャーじゃないわよねあれ。

比奈子

隼人さんの、彼女って感じてましたね。

麻里奈

(残っていたビールを飲み干し)かく。どうでもいいじゃんそんな事。それより研修三日も受けさせといて、これでキャンセルとか、許さないんだから。

香苗　今更だけど、さっさとサインしておけば良かった、あの契約書。

比奈子　どうしてですか？

香苗　解雇通知は二ヶ月前になつてたのよ。だとしたらこんな場合、少なくとも二ヶ月分の給与は保証されるはずでしょ。

比奈子　そうなんですか。

麻里奈　えっ、そうなの？何よあんたがゴチャゴチャ質問ばかりしてたから、ウチラもサインし損なつたじゃない。

香苗　誰も付き合えなんて言つてないし。

麻里奈　つたく。(ソデに向かい)お兄さくん、生お代わりまだ。

香苗　時給が良くて怪しい業務内容、そういう募集にはよくあるのよ、こういうトラブル。

麻里奈　楽な割に稼げそうなバイトだと思つただけどなく。

麻里奈　たかだか三日の研修だし、このままばつくれるつもりかもね。